トピック

農村ホームステイ 今年過去最多の3000人受け入れ

2014年3月13日

十勝の農家で都会の高校生が宿泊体験する農村ホームステイの受け入れ人数が、今年、過去最多の約3000人に達する。これまでの９、10月だけでなく６、７月にも受け入れることで時期を分散、受け入れ農家も増えたことで対応が可能になった。

農村ホームステイは、管内11の生産者団体などでつくるＮＰＯ法人「食の絆を育む会」（浦幌町、近江正隆理事長）が実施する事業。生産現場の仕事や暮らしを体験してもらい、都会に住む若い世代に農業や食についての理解を深めてもらうことが目的。

受け入れ人数の推移は初実施の2010年が720人、11年は2081人、12年は1400人。13年は15市町村で1314人が宿泊した。

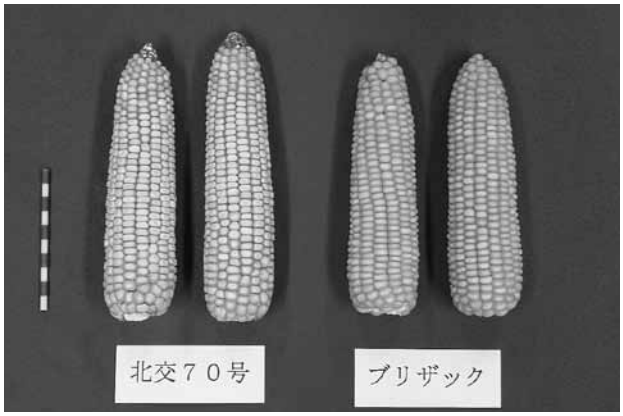
今年は受け入れ農家が昨年の400戸から500戸以上に増える見込みで、時期を分散することで農家の負担を軽くした。今年は昨年も参加した大阪府に加え、奈良県、埼玉県などからも高校生が訪れる。

近江理事長は「家族のような絆をつくり、遠くなっている都市と農村の距離を近づけたい」と事業の意義を強調。「（高校からの体験への）要望は１万人を超えており、全員を受け入れたいが、断らざるを得ない。受け入れ体制を充実できるよう、生産者と協力しながら理解を広げていきたい」と話している。

農業ガイド955号　飼料用トウモロコシ「きよら」開発 「すす紋病」に抵抗性　作付け拡大期待

2014年4月26日

農研機構北海道農業研究センター（北農研、札幌市）と道総研十勝農業試験場（芽室町）は、近年北海道で多発傾向にある「すす紋病」に抵抗性が極めて強い飼料用トウモロコシの新品種「きよら」を開発した。低温での育成が良く、十勝中部をはじめ、道央北部、北見・網走内陸部が栽培に適している。５月から種子の入手が可能になる。



新品種の「きよら」（北交70号）と市販品種の「ブリザック」の雌穂。きよらはブリザックより雌穂が長くやや細い（写真は２枚とも北農研提供）

すす紋病は冷涼地の代表的なトウモロコシの病害で、冷涼多湿条件で発生が増加し、病斑が大規模に広がると圃場（ほじょう）全体が枯れ上がることもある。輸入濃厚飼料が円安などで高止まりし、国内の飼料用トウモロコシの安定生産が必要とされるため、病害に強い品種の開発が求められていた。

きよらは北農研と道総研が共同開発した親系統の組み合わせによる一代雑種（Ｆ１）。2004年に交配し、十勝農業試験場で候補系統を選抜した。候補系統の中から収量、耐病性、耐冷性などの成績が良好だった系統（北交70号）が、２月に品種登録された。

早晩性はやや早い「中生の早」で、収量は同じ早晩性で一般的に市販されている多収品種「ブリザック」と同程度。耐冷性も「強～やや強」で、寒冷地に適している。

北海道の優良品種にも指定され、種子は日本草地畜産種子協会（東京）から種苗会社各社を通じて５月ごろから販売される。

生産現場の注意点では、密植による増収は期待できないことから、栽植密度は１㌃当たり800～850本。施肥管理は一般のトウモロコシの栽培基準に準ずる。

北農研は新品種について「飼料用トウモロコシの安定生産と作付け拡大に大きく寄与することが期待できる」としている。